



地方創生とみち・ シーニックバイウェイ



石田 東生 (いしだ はるお)

筑波大学システム情報系社会学域教授、
NPO法人日本風景街道コミュニティ代表理事

大阪府生まれ。東京大学土木工学科卒業。東京工業大学土木工学科助手、筑波大学社会学系講師、助教授を経て1996年から教授。その後、筑波大学第三学群社会学系類長、同大学院システム情報工学科社会システム・マネジメント専攻長、学長補佐、教育企画室長に就任。専門分野は、交通政策・国土政策・都市計画。(一社) JCOMM代表理事。国土交通省社会資本整備審議会専門委員、内閣府総合科学技術・イノベーション会議専門委員等公職多数。『環境を考えたクルマ社会』等著書多数。

急ぎすぎない地方創生

日本はいろいろな危機に直面しているが、消滅する・壊死する地方という危機はその筆頭であろう。このため国を挙げて地方創生の必要性が叫ばれ、まち・ひと・しごと創生本部をはじめ各自治体では政策検討が急ピッチで進められている。成果が大いに期待される場所である。しかし、一方で国主導の「上から目線」の地方創生であり、「あせい、そうせい」の地方創生であるとのシニカルな声も耳にするところである。地方創生は地方（言い方が悪ければ地域・コミュニティ）が発想・企画し、国はそれを全力で支援する、そのための仕組みづくりを行うという政府の考え方は全く正しい。しかし、発想は良くとも進め方がまずければその精神は貫徹しないことも事実である。現下の経済社会状況、政治状況を考えて一刻も早い成果発現がまたれるところではあるが、地域・コミュニティを元気にする、風景を美しくする、地域経済を活性化することの難しさを十二分に味わってきたのがシーニックバイウェイ※であり、その経験は地方創生において共有されるべき価値があると思う。一言でいうと、急ぎすぎないことの意味である。

みちとシーニックバイウェイ

「ドライブ」とカタカナで書くと、わが国では「自動車を運転する」「自動車はどこかへレジャー目的で出かける」と自動車が前提になる。しかし、運転する対象は辞書ではvehicleとあって、これは地上で人・モノを運搬する道具のことなので、交通手段も自動車に限らず、自転車・乳母車・馬・牛でもよいことになる。シーニックバイウェイでは自動車だけでなく、自転車・乗馬・徒歩なども重要な移動と楽しみ的手段と考えているので、もともとの運転対象の広がりの方がぴったりくるようである。driveには他にも意味がある。スクリードライバーはねじ回しのことで、「力を込めてモノを前に推し進めるもの」だし、ゴルフのドライバーは「モノを遠くへ運ぶもの」である。シーニックバイウェイ

※ シーニックバイウェイ

景観・シーン (Scene) の形容詞シーニック (Scenic) と、わき道・より道を意味するバイウェイ (Byway) を組み合わせた言葉。地域に暮らす人が主体となり、企業や行政と手をつなぎ、個性的で活力ある地域づくり、景観づくり、魅力ある観光空間づくりを目指す取り組みです。平成17年よりスタート、現在、11の指定ルート、3つの候補ルートがあり、約400団体が活動している。

